施設実習における学生の不安を軽減する事前学習についての研究

岩本　健一・高岡　昌子・高橋　千香子・林　悠子
奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

Study on Prior Learning to Reduce Anxieties of the Students during Practical Training at Childcare Facilities

Kenichi Iwamoto・Masako Takaoka・Chikako Takahashi・Yuko Hayashi
Naragakuen University Narabunka Women's College

施設実習に行く前の学生のほとんどは、不安と否定的な気持ちを持っている。しかし、実習が終わると良いイメージに変化する。学生が良いようにイメージを変化させるきっかけは、子どもとのコミュニケーションを通して行われることが分かった。子どもとのコミュニケーションを充実させるためには、子どもに対して自ら働きかけることのできる、気持ちの持ち方を含めた事前学習が必要である。そこで、実習を終了した学生が実習において不足していたと考える要素を分析し、6つのカテゴリからなるチェック表を作成した。

キーワード：施設実習、不安、事前学習、チェック表

1．はじめに

保育士資格を取得するにあたって、施設実習は必修である。しかし、河野（2011）[1] が「保育士は保育所で働くという強いイメージを持って養成校へ入学したものが多いことや、保育士養成校において行われる実習に施設実習があるということを入学した後に初めて知る者が多い」と言っているように、多くの学生は、保育実習とは保育所実習をイメージしている。そのような学生に、施設実習に積極的に意欲を持って取り組ませるためには、相当の事前学習が必要である。ところが土谷（2007）[2] は学生へのアンケートを通じて、「施設について、実習前は『いいイメージ』をもっている学生は41.5%（66人）であったが、実習後は98.7%（157人）の学生が『いいイメージ』を持った」としている。つまり、施設実習とは「現場の経験を通じて理解を図るもの」と捉えられていることが分かる。相浦ら（2008）[3] は、「実際は、実習指導の内容は各養成校の独自性がきわめて強く、実習そのものの内容は現場任せである場合が多い」と言っている。千葉（2008）[4] も、多くの養成校が、「実習施設の指導職員に一任している状態にある」ことを指摘している。このように、学生が抱くであろう施設実習の不安や疑問に対して、「行

岩本健一・高岡昌子・高橋千香子・林 悠子　〒631-8523　奈良市中登美ヶ丘3-15-1　奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

けば分かるから」とその不安や疑問の解消を施設現場に委ねて、養成校は学生の施設実習に臨むための事前学習を十分に満たしきれていないのではなかろうか。そうした疑問を出発点として、本論文は施設実習に臨む学生にとって必要な事前学習とは何かを明らかにすることを目的とする。

2．研究方法

2.1　研究対象

本研究の研究対象は奈良学園大学奈良文化短期大学部幼児教育学科平成28年度施設実習履修者85名である。平成28年6月から7月に行った施設実習の終了後に実施した「振り返りレポート」の回答を分析した。なお、対象者には、本研究の意図を説明し、回答者個人を特定しないものであること、教育・研究以外の目的以外には使用しないことを説明し了承を得た。

2.2　質問内容

「振り返りレポート」の質問項目は次のとおりである。各質問項目に対し、320字（パソコン入力で40字× 8 行）以上の自由記述による回答を求めた。

「振り返りレポート」質問項目
課題１　施設実習へ行って、施設のイメージがどのように変わったか。
（実習にいく前のイメージと終わってからのイメージを具体的に記載すること）
課題２　実習に行って何が不足していたか、気づいたことを記述する。

課題１の質問は、「実習にいく前の施設のイメージ」と「終わってからの施設のイメージ」を具体的に記載することを求めており、回答から実習前後の施設に対するイメージを比較した。課題2は、「実習に行って何が不足していたか」という質問であるが、寄せられた回答をカテゴリ化することによって、必要となる事前学習内容の抽出を図った。

3．結果及び考察

3.1　施設に対するイメージの変化

3.1-1　実習に行く前のイメージ

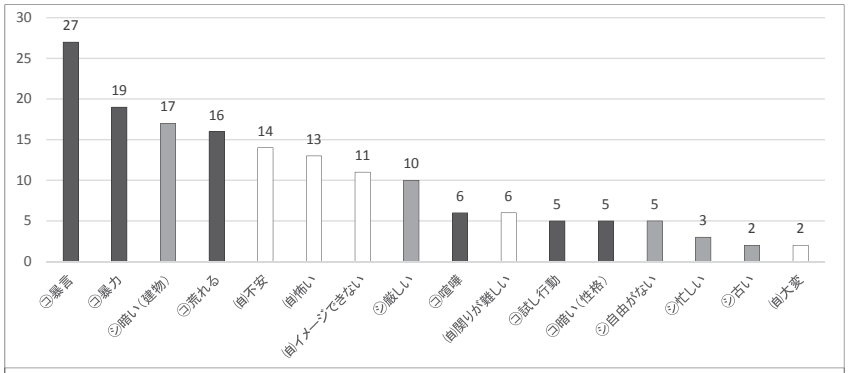
課題１　施設実習へ行って、施設のイメージがどのように変わったか。
（実習にいく前のイメージと終わってからのイメージを具体的に記載すること）

「実習にいく前のイメージ」について分析した。回答の文章から、カードワークにより頻出する単語を抽出したところ、グラフ1.のとおりであった。これらの項目については、その対象から「子ども」、「自分」、「施設・職員」の3つのカテゴリに分類することができた。3つのカテゴリのそれぞれの割合は、「子ども」50%、「自分」25%、「施設・職員」25%であった。

①学生が施設実習に対して思い浮かべるイメージの半分は「子ども」＝利用児を対象としている。その中から頻出単語を抽出したところ、最も多く使われていた単語は「暴言」で27個であった。以下「暴力」19個、「荒れる」16個、「喧嘩」6個、「暗い（性格）」5個、「試し行動」5個であった。

これらの言葉をつなぎ合わせるならば、施設の子どもは「暴言を吐き、暴力を振るって、荒れて喧嘩して、暗い性格で、実習生に試し行動をする」というイメージになるだろう。

グラフ1．頻出単語



㋑は子どもに対するイメージ、㋺は施設・職員に対するイメージ、㈲は自分自身の様子、のカテゴリを表す。

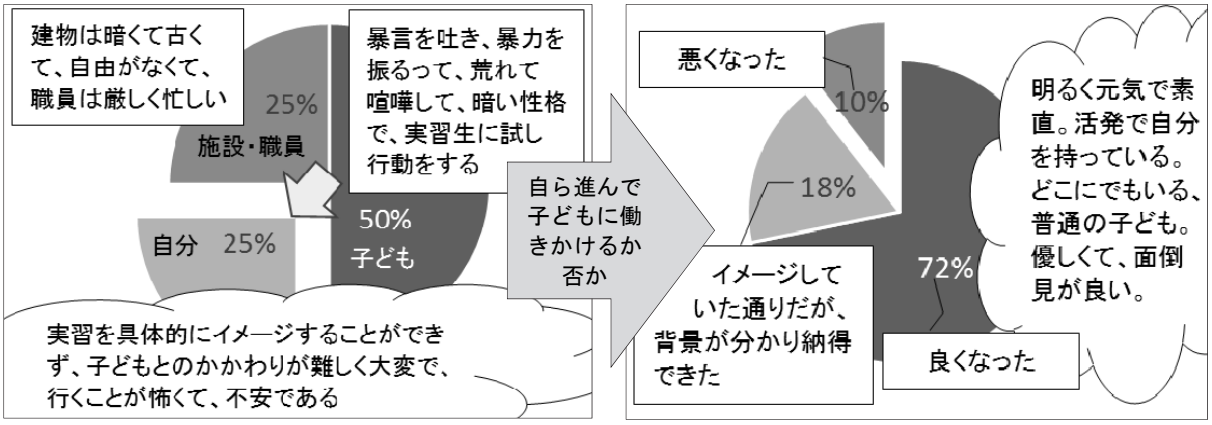
②　施設・職員に対して思い浮かべるイメージの割合は25%である。頻出単語は、「暗い（建物）」が17個で一番多かった。以下「厳しい」10個、「自由がない」5個、「忙しい」3個、「古い」2個であった。

これらの言葉をつなぎ合わせるならば、施設の設備や建物、職員は「建物は暗くて古くて、自由がなくて、職員は厳しく忙しい」というイメージになるだろう。

③　そして、実習に行く前のイメージとして学生は自分自身の様子を思い浮かべてみるようである。そこから頻出した単語は、「不安」14個、「怖い」13個、「イメージすることができない」11個、「関りが難しい」6個、「大変」2個であった。このことから施設実習に行く前の学生は、「実習を具体的にイメージすることができず、子どもとの関りが難しく大変で、行くことが怖くて、不安である」と感じている。

回答の中で、「友達から聞いていてある程度わかっていた」、「施設に興味があったので楽しみにしていた」と答えた学生が2名いた。しかし、2名以外の83名の学生は、子どもに対して否定的なイメージを持つか、またはイメージすることができないことにより、施設実習に不安を感じていることが分かった。（グラフ2左.）清水ら（2012）[5] の先行研究で、施設実習について、「とても不安である」77%、「少し不安である」15%と、9割を超える学生が施設実習について不安を抱いていたことを明らかにしていることからも、本調査だけの傾向でないことが分かる。

グラフ2. 実習に行く前のイメージ（左）と実習に行った後のイメージ（右）の変化



3.1-2　実習に行った後のイメージの変化

次に、実習に行った後のイメージの変化について分析した。（グラフ2右.）の通り、イメージが良くなった学生が61名（72%）、イメージしていた通りだが背景が分かり納得できた学生が15名（18%）、イメージが悪くなった学生が９名（10%）いた。

①イメージが良くなった学生の回答の一部。

・実際実習を受けてみると子どもたちは明るく関わりやすかった。この施設に来る実習生も多く子どもたちも実習生に慣れていたため受け入れが早かった。

・最初は話しかけると、逃げることや泣くことがあったが、優しく語りかけ子どもが興味の惹けるような話をすると、日にちが経つにつれ徐々に慣れてきたのか、笑顔で反応してくれるようになった。実習が終わりすごくさみしく感じた。

・想像とは違い、とても明るかった。子どもはみんな初対面の私に積極的に話しかけてくれた。また、自分の家庭環境を冷静に受け止めている子どもが多いように感じた。

・実習生が作業をしているとさりげなく手伝ってくれたり、テレビの話題や日常の何気ない会話をしたりと楽しく子どもたちと過ごすことができた。子どもたち同士も年齢関係なくみんなで仲良くしていて、中高生の子どもたちは小学生の面倒をみたりしてお互い協力しあって生活をしていた。

以上のように、子どもとの関わりを記している部分に傍線を引いた。このように学生の回答からは、実習前のイメージとは反対に、子どもに対して「明るく元気で素直。活発で自分を持っている。どこにでもいる、普通の子ども。優しくて、面倒見が良い」などと感じている。学生がイメージを良いように変化させるきかっけは、子どもとのコミュニケーションであることが分かった。

②イメージしていた通りだが背景が分かり納得できた学生の回答の一部。

・「こっち来んな」と言葉では言うが、私の手を握りながら言ってきたりして、言葉が荒くても行動から「構って欲しい」という思いが見えることもあるので、そういった面では子どもに対して可愛さを感じた。

・施設で暮らす子どもたちにとっては家なので、わがままな面もあって当たり前だと思った。ただ、同じ

ような年齢どうしの子どもがいるためトラブルは多いが、私が想像していたような喧嘩ではなかった。

・普通の家庭の子どもと大きな変わりはなかった。言葉づかいや、発達の遅れ、自分の感情をうまくコントロールできない等の、過去のその子の家庭環境が関係してそのような姿は見られたが、自分の得意なことを一生懸命に取り組む姿や自分自身としっかり向き合っている姿がとても印象的である。

以上のように、学生が解釈を記した部分に傍線を引いた。このように、実習に行く前に、「施設の子どもは暴言を吐き、暴力を振るって、荒れて喧嘩して、暗い性格で、実習生に対して試し行動をする」という、持っていたイメージ通りの行動を子どもがしたにもかかわらず、子どもとのコミュニケーションを通して、納得し理解を示すようになることが分かった。

③イメージが悪くなった回答の一部。

・ほとんどの子どもは職員と普通に会話をしていた。しかし実習生には厳しく対応してくる面も多くあった。話しかけても無視をされたり、小声で嫌なことを言われたりした。

・行ってみるとまず馴染むことが難しかった。ホームに入ったときは誰も話しかけてくれることなく、一人アウェー状態であった。

・小学生から高校生の児童はやはり想像通り快く迎えてはくれなかった。女の子は関わるのが困難であった。子どもたちは無視をしたり暴言を吐いたりしていた。

・グループに入ったとき子どもたちは、私のところに来てくれると思っていたが真逆で怖がられた。保育園とは全然違うことが分かった。

・子どもたちも年齢が上がるにつれて、時間やルールを守っていなかった。職員の方々も注意を聞かないと呆れている。

このように、ルーズな生活にイメージを悪くした学生もいるが、ほとんどは子どもとのコミュニケーションを十分に持てなかったことに原因があることが分かった。

本調査は実習後に調査したことで、実習前に持っていたイメージも素直に思い返すことができたと思われる。実習前には、97％の学生は、子どもに対して否定的なイメージを持つか、またはイメージすることができないというものだった。それが、実習後には、良くなった学生が72％、イメージしていた通りだが背景が分かり納得できた学生が18％に変化したことが明らかになった。回答から、施設実習に行っていいイメージを持つかそうでないかは、子どもとコミュニケーションが取れるかどうかにかかっていることが分かった。子どもとコミュニケーションをとるためには、学生が自ら進んで子どもに対して働きかける態度が必要である。自ら働きかけるためには、気持ちの持ち方を含めた、事前学習が必要である。学生はどのようなことが準備不足であったと考えているのか、次節で明らかにしたい。

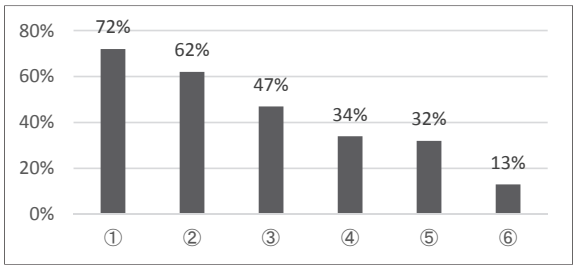
3.2　実習に行って不足していたこと

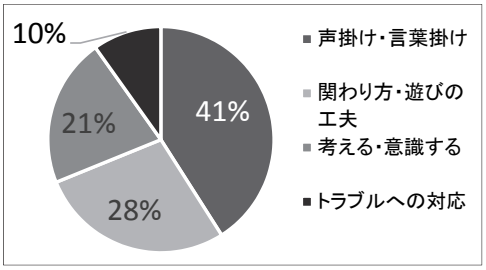
課題２ 実習に行って何が不足していたか、気づいたことを記述する。

3.2-1　不足していたことのカテゴライズ

振り返りレポートの課題２の質問は、学生が「実習に行って何が不足していたか、気づいたこと」を記述する。回答を内容ごとのまとまりに分けたところ、85名の学生から221個の「不足していたこと」を抽出することができた。一人当たり2.6個の「不足していたこと」に気付いたことが分かった。「不足していたこと」をカードワークによって分類した結果、６つのカテゴリに分類することができた。それらは、①子どもに対する働きかけ61個、②事前の学習53個、③やる気40個、④日誌の書き方29個、⑤職員に対する働きかけ27個、⑥家事の習得11個、であった。分類したそれぞれのカテゴリに当てはまる不足の数を学生数85で割った「不足に気付いた学生の割合」がグラフ3. である。それによると、①「子どもに対する働きかけが不足」していたと気付いたのは72％の学生であった。②「事前の学習が不足」していたと気付いたのは62％の学生。③「やる気の不足」に気付いたのは47％の学生。以下④「日誌の書き方の不足」34％、⑤「職員に対する働きかけ不足」32％、⑥「家事の習得不足」13％、の学生であった。

グラフ3. 不足に気付いた学生の割合　グラフ4. 子どもに対する働きかけで不足していたことの割合





①子どもに対する働きかけで不足していたこと（61個）（グラフ4.）

「声掛け・言葉掛け」が不足していたとの回答が一番多く41％（25個）であった。次に、子ども一人ひとりを見ることができないことや、遊びや歌のレパートリー少ないこと、さらに注意する勇気が持てなかったなど、「関り方・遊びの工夫」が不足していたとの回答が28％（17個）であった。子どもへの配慮が足りないことや、子どもの気持ちを読み取ろうとする気持ちや、また生活の場の意識などが足りていなかったなど、「考える・意識する」が不足していたとの回答が21％（13個）であった。けんかの仲裁やパニックを起こした子どもへの対応になす術がなかったとする「トラブルへの対応」への不足が10％（６個）あった。

筆者は以前、実習日誌に記載された職員のコメントを分析する研究を行った[6)]。実習日誌の職員のコメントで頻出した動詞は、表5. の通りである。ここで一番多かった動詞は「声をかける」である。このことから、施設職員が重要と感じていることが、実習生にとっても重要と感じていることが分かった。そこでは、実習生の日誌に施設職員が返答するコメントを分析したところ、3つのカテゴリに分類することができた。一つは「受容」カテゴリで、ねぎらいの言葉や、実習態度や日誌の記述を肯定する言葉によって、学生に対して情緒的な関わりを結ぶ特質を持つカテゴリである。二つ目は、「知識」カテゴリで、利用児・者の現状や、実習に対する心構えや注意事項と、施設の情報を、「××は△△である」という「存在文」によって、必要な知識を伝える特質を持つカテゴリである。三つ目は「方法」カテゴリである。

それは、利用児・者との関わり方や、実習態度について、「□□する」という「動詞文」によって具体的に実践方法を伝える特質を持つ。

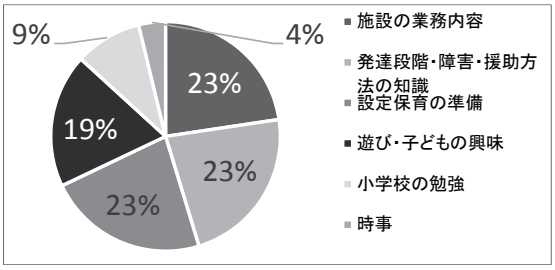
表5.「方法」カテゴリの主な動詞とその数

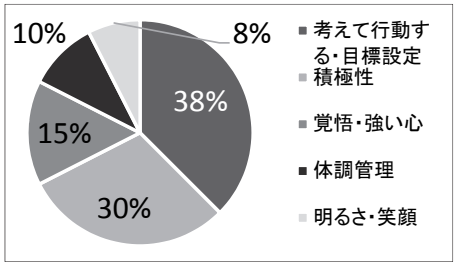
順位	動詞（使用数）	順位	動詞（使用数）	順位	動詞（使用数）	順位	動詞（使用数）
1	声をかける（174）	2	伝える（110）	3	考える（86）	4	聞く（80）
5	関わる（75）	6	見る（53）	7	観察する（50）	8	話す（35）
9	体調に気を付ける(33)	10	褒める（32）	11	楽しむ（32）	12	笑顔になる（28）
13	知る（27）	14	気づく（26）	15	理解する（24）	16	配慮する（23）

②事前の学習で不足していたこと（53個）（グラフ6.）

「施設の業務内容」と「発達段階・障害・援助方法の知識」と「設定保育の準備」の３つの項目が共に23%（12個）ずつで並んだ。「施設の業務内容」では、自分が実習する施設の種別（児童養護施設、乳児院など）の知識について調べておくべきだったという回答であった。また、「発達段階・障害・援助方法の知識」では、乳児の特徴や関わり方、障害についての知識、子どもの発達段階についての知識が不足していたとの回答であった。さらに、「設定保育の準備」では、実習施設30施設のうち実習生に設定保育を課している施設は９施設であって、その内訳は児童養護施設5施設、乳児院３施設、児童発達支援センター１施設である。このように、すべての施設で設定保育が課されている訳ではないが、設定保育を課す施設は事前にオリエンテーションで学生に伝えていることが多い。しかし学生は、実習が始まる前に、対象となる子どもを具体的にイメージできない状態で設定保育の内容を考えることが難しく、準備不足で臨んだ設定保育では十分にやり切れなかった不充足感を感じてしまったようである。他に、「遊び･子どもの興味」が19%（10個）であった。アニメや漫画の知識、遊びのレパートリーやルールなどに不足を感じたようである。また、「小学校の勉強」が９％（５個）、「時事」が４％（２個）など、子どもとの遊びや宿題を見るような場面で十分に関われなかった思いがあったと思われる。

グラフ6. 事前の学習で不足していたことの割合　グラフ7. やる気で不足していたことの割合





③やる気で不足していたこと（40個）（グラフ7.）

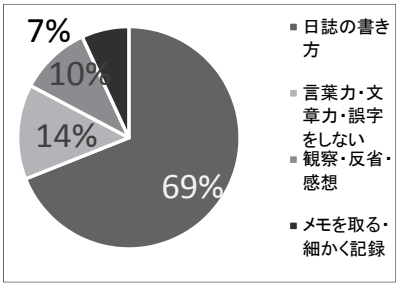
ここでいう「やる気」とは、実習に当たっての意欲やモチベーションと、それを具体化する方法についてのことである。一番多い回答は、目標設定が低かったり、どのように行動するべきなのか考えて

行動することが不足していたりという「考えて行動する・目標設定」の不足が38%（15個）であった。これは筆者の「実習日誌の職員のコメント」（表5.）の三番目の項目「考える」に対応しており、ここでも施設職員が重要と感じていることが、実習生にとっても重要であることが分かった。次に「積極性」の不足が30%（12個）、何があっても動じない「覚悟・強い心」が不足していたとの回答が15%（6個）、「体調管理」の不足が10%（4個）、「明るさ・笑顔」の不足が8%（3個）であった。

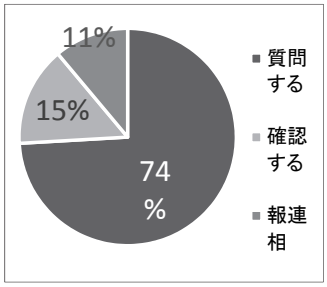
④日誌の書き方で不足していたこと（29個）（グラフ8.）

グラフ8.のとおり、日誌に何を書いてよいか分からない、保育所実習や幼稚園実習での書き方との違いに戸惑った、など「日誌の書き方」全般に対する不足が69%（20個）、「言葉力・文章力・誤字をしない」の不足が14%（4個）、「観察・反省・感想」が足りないとするのが10%（3個）、「メモを取る・細かく記録」の不足が7%（2個）であった。

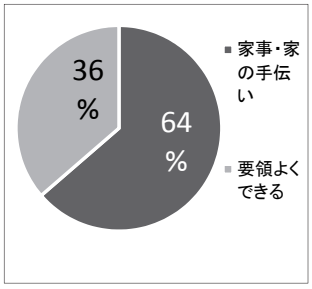
グラフ8. 日誌の書き方



グラフ9. 職員に対する働きかけ



グラフ10. 家事の習得



⑤職員に対する働きかけで不足していたこと（27個）（グラフ9.）

グラフ9.のとおり、積極的に質問したり、疑問を持ち質問したり、分からないことをすぐに聞くなど「質問する」ことの不足が74%（20個）で一番多かった。これは筆者の「実習日誌の職員のコメント」（表6.）の四番目の項目「聞く」に対応している。次の「確認する」15%（4個）、「報連相」11%（3個）も、二番目の項目「伝える」に対応しており、ここでも施設職員が重要と感じていることが、実習生にとっても重要であることが分かった。

⑥家事の習得で不足していたこと（11個）（グラフ10.）

グラフ10.のとおり施設は生活の場であることを確認するにつれて、掃除や洗濯、食器洗いなど、「家事・家の手伝い」の不足に気付くようである64%（7個）。しかも、たどたどしい自分の動きから「要領よくできる」ことの不足を感じた学生もいた36%（4個）。

施設職員のコメントとの対比からも明らかなように、施設実習において施設職員が求める学生の行動と、学生自身が「不足しないように」と考える行動は関連している。6つのカテゴリの要素を学生が獲得することができれば、効果的に施設実習を展開することができると思われる。このように、施設実習の事前学習においては、6つのカテゴリの要素を獲得する学習を展開する必要があることが分かった。

（表11.）実習の取り組み点検チェック表

番号	氏名

子どもに対する働きかけ

□	声掛け・言葉掛け
□	関わり方・遊びの工夫
□	考える・意識する
□	トラブルへの対応

や る 気

□	考えて行動する・目標設定
□	積極性
□	覚悟・強い心
□	体調管理
□	明るさ・笑顔

職員に対する働きかけ

□	質問する
□	確認する
□	報連相

事 前 学 習

□	施設の業務内容
□	発達段階・障害・援助方法
□	設定保育
□	遊び・子どもの興味
□	小学校の勉強
□	時事

日誌の書き方

□	日誌の書き方
□	言葉力・文章力・誤字をしない
□	観察・反省・感想
□	メモを取る・細かく記録

家 事 の 習 得

□	家事・家の手伝い
□	要領よくできる

４.今後の課題

実習に行って不足していたことを分類すると、6つのカテゴリになった。

そこで、それぞれのグラフのデータラベルの前にチェックボックスを設けて、各自でチェックし確認出来るようにした「実習の取り組み点検チェック表」（表11.）を作成した。表の左側には、主に事前に学習しておく事柄である①子どもに対する働きかけ、②事前の学習、③やる気、のカテゴリを配した。右側には、主に実習中に心がける事柄である④日誌の書き方、⑤職員に対する働きかけ、⑥家事の習得、のカテゴリを配した。分類したカテゴリには、不足の数の大小があるが、そのことがカテゴリの優劣を表すものではないので、グラフの大きさを同じにそろえた。

施設実習に行く前は、施設実習がイメージしにくいことから、不安と否定的な気持ちが大きい。そうした状態から実習を始めると、安心して肯定的な実習を行うに至るまで、大きなエネルギーを必要とする。そこで、事前学習において気持ちの持ち方を整えておくと、学生のエネルギーは本来学ぶべき実習にスムーズに注入されることが可能になる。このことから、学生自身で事前準備と実習中の行動の確認を行うことができる「実習の取り組み点検チェック表」が有効であると考える。しかし､チェック表は、項目の確認は行えるが、時系列を追って確認ができるまでにはなっていない。今後は、実際に使用しながら、時系列にも対応できるなど、さらに工夫を重ねていきたいと思う。

引用文献

１）河野清志（2011）保育学生の施設実習に対する自己効力感尺度の作成について．山陽学園短期大学紀要，42: p29.

２）土谷由美子（2007）保育実習に関する意欲と現状について：学生のアンケートを中心に．中国学園紀要，6: p171.

３）相浦雅子他（2008）保育実習指導のミニマムスタンダードを軸とした保育所実習指導の実際に関する研究．別府大学短期大学部紀要，27: p77.

４）千葉弘明（2008）「保育実習指導のミニマムスタンダード」を取り入れた保育実習のあり方について．千葉経済大学短期大学部研究紀要，4: p20.

５）清水里美他（2012）保育士養成課程における実習指導上の留意点注１）―施設実習の事前指導における教育内容の検討―平安女学院大学研究年報，13: p23.

６）岩本健一（2015）施設実習における実習日誌の指導コメントの数量的分析と考察、保育士養成研究，32: p1-10.